

\* (新)等の表記：実際は漢字を○で囲んだもの。以下同様。

三十八年勤めた学校を離れてから、少しの間を置いて町の教育委員会の常勤の職に就いたので、時間に制約される昔の生活にまた戻ってしまった。朝も職員と同じように出勤しなければならぬので、愉しみにしているNHKの朝の連ドラをゆっくり見ている時間がなくなってしまった。BSで朝七時三十分から放送していると教えられ、「べっぴんさん」から見始めた。視聴率二十パーセントを超えるだけあってなかなかの好内容であった。

今回の「ひよっこ」も大変愉しみにしていて、なぜかというところ、「あまちゃん」以来の有村架純の隠れファンで、どこにでもいそうでもないところがとてもいいし、庶民的で美人過ぎないところがまたいい。娘にしたいくらいの乗りでいつも見ている。また、「ひよっこ」には型破りな叔父の小祝宗男役で、山辺町の電器店の息子、パンクバンド銀杏BOYZの峯田和伸も出ていて、何か不思議な親近感がある。

その「ひよっこ」の初回を見て驚いた。我が郷土を代表するバス会社山形交通のバスに、高校へ通学するという設定で、主人公「みね子」に扮した架純ちゃんが学友たちと乗っているではないか。しかもその山交のバスは古いボンネットタイプで、(新)6787と車体番号まで振ってある。

私はこのバスは、新庄から肘折温泉まで運行されていた、いすゞ製の四輪駆動車であると確信した。山交バスの車体番号にはきまりがあり、営業所の記号の後ろに算用数字が入っていた。営業所の表記は、山形本社なら(山)、寒河江営業所なら(寒)というふうに入れてあり、あのバスは間違いなく新庄営業所のバスである。しかも四輪駆動のボンネットバス、雪深い肘折温泉行きである。

6787にも意味があつて、一九六七(昭和四十二)年に登録した87番目のバスであることを示している。だから、みね子の父親(沢村一樹)が出稼ぎに行っているのは東京オリンピックの直前だから、一九六四(昭和三十九)年のことであり、三年ほどのズレがあるのだが、そんなズレは大したことではなく、このバスがドラマに登場しただけでもウルウルと来そうであった。

そのほかにも山交バスには車種ごとに愛称が決められており、車体の側面に表示されていた。例えばあのいすゞのボンネットバスは、確か「ぎんれい」だったと思うし、同じボンネットバスでもトヨタ製は「さくら」、三菱ふそう製のロングボデー車は「はやま」だった。ほかに「ちょうかい」「こまくさ」など、県内の山々の名前や山形に縁のある草花の名前が充てられていた。山交バスは、赤とピンクと白で染め分けられていて、それぞれ「さくらんぼ」「桃」「雪」を表している山形らしいカラーであった。

中学校の修学旅行で東京に行った時、上野公園の近くだったような気がするが、山交バスに出会った時の感動といったらなかった。山交のカラーは遠目からでもよく分かる。引っ込み思案な東北人気質丸出しの中学坊主たちが、人目を憚らず遠くから手を振った。何か不思議な懐かしさと誇りめいたものをみんな感じ取っていたのだ。山形県人を意識した最初の瞬間だった。

私が山交バスにひときわ愛着があるのには訳がある。私は山形大学に通っていた学生時代、夜行バスの添乗員としてアルバイトをした。当時の労働基準法は女性の夜間乗務を禁じていたのだ。だからバスガールならぬバスボーイとして東京山形間を往復した。時に蔵王にスキー旅行に来る女子大生のお世話係として、時に出稼ぎから戻る帰省バスの添乗員として……。

途中の停車地の確認や予定時刻、乗車中の注意事項などをアナウンスしなければならぬ。女子大生の前ではやけに緊張し、訛らなくてもいいところも訛ってしまった。出稼ぎの帰省バスは最初から酒盛り状態。観光バスのガイドと勘違いされ、何か歌えだの何か芸をしろだの、今日のガイドは男で面白くないだの、散々な目に遭った。

あれは忘れもしない年明けの夜間の上京バス。今の高速都市間バスの走りともいうべきもので、正月やお盆の時期などの繁忙期に、各営業所からバスを集めて東京まで何十本と走らせていた。あの日はひどい吹雪で道路も圧雪状態。宮宿から寒河江、山形、上山で乗客を拾い、翌朝東京へ着く予定だった。

赤湯の鳥上坂は凍結状態でノロノロ運転。だいぶ時間をオーバーして日が変わる頃ようやく米沢に辿り着いた。米沢で最後の乗客を乗せ、栗子峠に差し掛かろうとしたとき、バッテリーがチャージしてしまい、エンジンがウンともスンとも動かない。運転手二人掛かりで何とか動かそうとするが、外は吹雪、道路は圧雪状態、次第にバスの中まで寒くなってしまった。乗客の視線と今後どうするのかという詰問は二十歳そこそこの学生にはきつかった。何とか謝り通して乗客に我慢してもらうしかなかった。

バスが動かなくなってからもう二時間以上が経過し、乗客の我慢も限界に来ていた。ようやく米沢営業所と連絡が取れたのが午前二時過ぎ、営業所から代替のバスが到着したのが三時を少し回った頃だった。

乗客に代替のバスに乗り換えてもらい、すぐさま出発。その後福島に入った頃に雪は止み、一路東京を目指した。遅れは順調に回復し、運転手や添乗員の苦勞が見て分かったのだろう、誰ひとり文句を言う人もなく、感謝の言葉も受けて降車してもらった。事故の状況を分かりやすく、少しずつアナウンスしていたことが幸いしたのだとあとで運転手から聞いた。

帰りは空バスで翌日宮宿に戻った。勤務明けにケンちゃんと呼ばれていた運転手から、「ご苦勞様、一杯どうだ」と声が掛かり、三人で苦勞を分かち合った。少年の気配を漂わせた若年の大学生が成年としてひと皮剥けた瞬間だった。